

「被葬者は神宮縁の人物か…」

またみ
又見古墳

香取遺産

Vol.29



▲社殿東側に残る又見古墳石室

香取神宮の西方、又見の集落を見下ろす高台に又見神社が鎮座しています。現在の社殿は江戸時代に建てられたものですが、当社は鎌倉時代の文書にも「又見社」とみえる古社で天苗加命、武沼井命、天押雲命の三柱（一説には、天稚彦命、下照姫命を加えて五柱）を祀るとされています。訪れた人は気付かれましたが、社殿のすぐ東側に崩れかけた石室がむなしく露出しています。これが今回紹介する又見古墳です。

本古墳は、香取神宮より西方550mに位置し、標高37mの丘陵東南斜面に造られています。又見神社社殿東側に接するように石室のみが残存するだけで、現状では墳丘を確認することはできません。また、石室西側3m社殿床下にも雲母片岩板石を組合せた箱式石棺が1基あり、同一古墳内の埋葬施設であった可能性もあります。

石室は、板状に加工した雲母片岩を組み合わせた横穴式石室で、現状では遺骸を安置する主室（玄室）だけが残っていますが、傍らに板石が数枚存在することから、外部から主室に通じる通路である羨道部が設けられていたと考えられます。奥壁1枚、左右側壁各2枚、玄門2枚、天井石2枚で構成され、床面には同じ石材の割石が敷かれています。主軸長185cm、幅135cm、高さ120cm、玄門入口幅45cm、高さ65cmで東南に開口しています。この字形に挟り抜いた板石を合わせた玄門は大変珍しいもので、現在のところ下総地域においては全く類例がなく、雲母片岩の産出地と考えられる筑波周辺に数例見られるだけです。副葬品などは全くわかっていませんが、石室の特徴から、7世紀中葉の築造年代が考えられています。本古墳は神宮に最も近い場所に造られた古墳であり、石室の構造だけでなく、神宮の成立を考える上でも大変重要な古墳です。昭和45年5月27日に市の史跡に指定されています。